

# 『源氏物語』宿木卷における朝顔の贈答歌

— 歌が紡ぎ出す物語 —

## 磯部一美

### 一 はじめに

宿木卷は「宇治十帖」中最も長大であり、様々な出来事が矢継ぎ早に語られる巻である。薫と今上帝女二の宮の結婚話が始まるこの巻は、匂宮と夕霧女六の君の結婚、中の君の懊悩、薫の恋情愁訴、中の君の出産へと続き、その展開の性急さは、あたかも橋姫巻から連綿と続く大君・中の君物語の流れを一気に収束させてしまおうとするが如くである。さらにこの巻は、その後半に『源氏物語』最後のヒロイン浮舟の登場という新たな物語の始発が予感させられてもおり、多く宿木卷は、大君物語から浮舟物語へのつなぎの巻であるとか、正編の二番煎じの女君中の君の悲嘆を語る巻であるなどと論究されてきたのであった。<sup>1)</sup>

大君や浮舟といった特異な人生を歩んだ二人に比べて、貴顕と結ばれ都において平穩な生を歩んだ中の君の評価は必ずしも高いもの

ではない。しかし、その大半が論拠とするのはこの宿木卷であり、それは換言すればこの巻における中の君像の考察がいかに重要であるかということを意味している。<sup>2)</sup>

本稿では、夫匂宮と夕霧女六の君の結婚が迫ったある朝の、朝顔をめぐる中の君と薫の贈答歌を中心に取り上げる。後に薫の添い臥し事件を招き、それに困じた中の君が浮舟を呼び込むという新たな展開の始発点となっているこの場面は、物語において如何なる意味を持つのだろうか。勿論、本稿はこの一場面のみを取り上げて従来の中の君像を覆そうと試みるものではない。ただ、こうした中の君の詠歌及びその周辺を表現に即して辿っていくことで、物語における中の君造型、ひいては中の君の、物語における役割を解明する端緒となればと考えている。

## 二 薫の贈歌

まず、考察の対象とする本文を掲げる。

声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど、あやしき  
 までただそれとのみおぼゆるに、人目見苦しかるまじくは、簾  
 も引き上げてさし対ひきこえまほしく、うちなやみたまへらん  
 容貌ゆかしくおぼえたまふも、なほ世の中にも思はぬ人は、  
 えあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られたまふ。…折り  
 たまへる花を、扇にうち置きて見ぬたまへるに、やうやう赤み  
 もて行くもなかなか色のあはひをかくし見ゆれば、やをらさし  
 入れて、

(薫) よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝  
 顔の花

ことさらびてしもてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよ  
 とをかくし見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

(中の君) 消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露  
 はなほぞまされる

何にかかれる」といと忍びて言もつづかず、つつましげに言ひ  
 消ちたまへるほど、なほいとよく似たまへるものかなと思ふに  
 も、まづぞ悲しき。〔宿木卷三九三〜三九五頁〕<sup>①</sup>

匂宮と夕霧女六の君の結婚は、中の君に妻としての絶望をもたら  
 しただけでなく、その仲介役である薫にも深い憂愁を抱かせる一件

であった。それは、臨終の大君に「このとまりたまはむ人(中の君)  
 を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へた  
 まはざらましかば、うしろやすからましょと、これのみなむ恨めしき  
 ふしにてとまりぬべうおぼえはべる」〔総角三二七頁〕とまで口にさ  
 せた、中の君と匂宮の結婚(中の君の現在の不幸を招いたこと)へ  
 の自責の念と、それによって大君の忘れ形見である中の君を自らの  
 手で失ってしまったことの後悔の念とである。それまで薫は、大君  
 にいよいよ似てくる中の君に恋情を募らせながらも、自らに課した  
 後見人としての役割を誠実に果たそうと努めてきたのであった。し  
 かし苦境に立たされた中の君の様子はあまりに大君に似通ってお  
 り、恋情を押さえることができない。

薫の歌は「よそえて見るべきでした。白露が約束してくれた朝顔  
 の花——貴女ではなかったでしょうか」の意である。「白露」は大君、  
 「朝顔の花」は中の君を喩えている。薫のこの歌は、例えば新編全  
 集には「人間のはかなさ、中の君との縁の薄さを嘆く歌」とある。し  
 かしこの歌には、そうした諦念に収まりきらない、薫の蠢く欲望が  
 詠み込まれているのではないか。<sup>②</sup>

まず「白露のちぎり」に着目してみよう。薫は一体何を根拠に  
 「大君が約束してくれた貴女ではなかったか」と詠出したのか。仮  
 にその言葉を信じるならば、薫は大君と中の君の処遇について「ち  
 ぎり」を交わしたことになる。しかし大君の意向は老女房弁を通じ  
 て間接的に伝えられただけであり、先に掲げた臨終の大君の言葉

「このとまりたまはむ人(中の君)を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに…」からも、直接大君との間に「ちぎり」が交わされたわけではないことが分かる。

一方、「かかる筋にはいますこし心も得ずおほどかにて、何とも聞き入れたまは」ぬ「総角二四七頁」中の君が、大君の思惑に気付いたのは、薫が既成事実を作ってしまったおうと大君(実際には姉妹)の寝所に忍び込んだ、あの夜の一件であった。

中納言は、独り臥したまへるを、心しけるにやとうれしくて、心ときめきしたまふに、やうやう、あらざりけると見る。いますこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてやとおぼゆ。

…逢ふ人からにもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心地して、「あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御さま、見ならひたまふなよ」など、後瀬を契りて出でたまふ。我ながら、あやしく夢のやうにおぼゆれど、なほつれなき人の御気色、いま一たび見はてむの心に思ひのどめつつ、例の、出でて臥したまへり。【総角二五三―二五五頁】

注意すべきは、薫はここで初めて中の君に一方ならぬ恋情を抱き、「後瀬を契」っているという点である。薫と中の君の関係において「契り」という語が使用されるのは、実はこの一箇所しかない。もしかして、薫の言う「白露のちぎり」は、実はこの「契り」なのではないだろうか。つまり、大君によって互いが恋の相手として認

『源氏物語』宿木巻における朝顔の贈答歌(磯部一美)

識させられたこの一件、そしてそこで交わされた「契り」こそが、薫が中の君に訴えかけた「白露のちぎり」ではなかったか、ということである。

さらに下の句「朝顔の花」にも目を向けてみよう。薫が中の君に朝顔を差し出した直接の動機は何だったのか。本文を再掲する。

折りたまへる花を、扇にうち置きて見るとたまへるに、やうやう赤みもて行くもなかなか色いろのあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れて…。

傍線部に注目すると、薫の視線はただ漠然と朝顔に向けられていたのではなく、赤みを帯びてゆく様子にこそ注がれているということが分かる。そしてそれは、はかなさよりもむしろ「をかし」さのうち捉えられているのであった。朝顔の花の色については、例えば万葉集に次のような歌がある。<sup>①</sup>

花に寄する

- ① 臥いまるび恋ひは死ぬともいちらく色いろには出でじ朝顔が花  
② 言に出でて言はばゆゆし朝顔のほには咲き出ぬ恋もするかも  
①は「恋に焦がれて死んだとしても、決して著しく色に出すまいよ、朝顔の花のように」、②は「言葉に出して言うのは憚られる。朝顔のように目立たない恋をすることだ」の意である。『古今和歌六帖』には「人しれぬ」の項にこの歌が収載されており、原岡文字氏は、この歌に「秘められた恋のイメージを朝顔に結ぶ」<sup>③</sup>ことができる」と指摘している。

しかしそれは逆に、朝顔の花の色は秘められていたはずの恋を露呈してしまう危うさをかかえているとも言い換えることができるのではないだろうか。しおらしくはかなげな花、しかし枯れる瞬間、その存在を誇示しようとするように色づく、その赤い色の鮮明さ、艶やかなイメージが、この歌の根底にはあるのである。そしてそれは、朝顔が多く「女の朝の顔」と重ね合わされることも決して無縁ではないだろう。

薫の歌自身には色づいた朝顔は詠み込まれていない。しかし大君を喩えた「白露」の「白」は、まさに「赤」く移ろう朝顔との対比であり、それは「赤い朝顔」を詠み込んでいるのに等しい。朝顔は、女の朝の顔——一夜を共に過ごした、あの中の君の顔(姿)なのである。

そもそも薫の中の君への未練は、今までも直接的に間接的に、幾度となく語られてきたのであった。<sup>⑩</sup>しかし今回は状況が違う。匂宮は今、当代一の権勢家である夕霧右大臣家に奪われようとしているのである。

花心におはする宮なれば、あはれとは思すとも、いまめかしき方にならず御心移ろひなんかし、女方も、いとしたたかなるわたりにて、ゆるびなくきこえまつはしたまはば、月ごろも、さもならひたまはで、待つ夜多く過ぐしたまはんこそ、あはれなるべけれ……

〔宿木二八六—二八七頁〕

「花心におはする宮」とは匂宮のことであるが、薫がここで匂宮

を好色人と断定する根拠は実は乏しい、ということには既に指摘されている。<sup>⑪</sup>「花心」は薫の主観であり、そう捉えたい願望の表れであろう。波線部「かならず……」「いとしたたかなる……」「過ぐしたまはんこそ……」と、強調を重ねることによって推論を重ねていく薫の思惟のありようは、中の君の悲劇、さらには夫婦の危機という結論、確信へと結びつき、薫の欲望をさらに掻き立ててゆく。

匂宮から中の君を奪うのではない。中の君の幸せを奪うのではない。匂宮にうち捨てられた中の君を手に入れるのだ——赤く移ろう朝顔の花にあの夜の一件を託した薫の歌は、その肥大化する欲望そのままに、強く恋情を訴えかけるものなのである。<sup>⑫</sup>

### 三 中の君の答歌

こうした薫の贈歌に中の君はどのように答えたのか。歌意は「露が消えぬ間に枯れてしまった花のようにはかない姉君でしたが、後に残された露のような私は、なおいっそうはかない身の上です」である。

薫が中の君を「朝顔の花」に喩えて恋情を訴えたのに対し、中の君はそれを「枯れぬる花」と退け、さらにそれよりはかない我が身は「露」のようだとい概嘆している。薫の贈歌とは表現的にも内容的にもほとんど共通点が見い出せないことから、答歌というよりはむしろ独詠歌に近いものとまずは言うことができよう。先行研究も「薫の贈歌をうまく切り返した歌」という見解で概ね一致している

ように思われる。<sup>13)</sup>

確かに中の君の立場からすれば、安易に薫の恋情に応えるわけにはいかない。しかしだからといって返歌をしないのでは都合が悪い。そこでこのような歌になったのだという理解が、一応妥当のようには思われる。しかし「(露の)消えぬまに、枯れぬる花のはかなさに、おくるる露は、なほぞ(はかなさ)まされる」と、言葉を補ってやらねば訳せぬ程、この歌は歪んだ構造をしているのであり、それは中の君の屈折した想いをそのまま反映しているのだと言えるのではないだろうか。

まず上の句「消えぬ間に枯れぬる」であるが、周知の通り、ここには大君臨終の場面、

見るままにもの枯れゆくやうにて、消えはたまひぬるはいみじきわざかな。〔総角三二八頁〕

が重ね合わされている。中の君は、枯れゆく花に大君の死を想起している。それは大君の死の追認行為とすることもできようか。そしてさらに注目されるのは「露」という語である。本文を再掲する。

ことさらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよとをかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる

何にかかれる」といと忍びて…。

二重傍線部は、それぞれ「露を落とさないで」、「(露を)置いたま

『源氏物語』宿木巻における朝顔の贈答歌(磯部一美)

ま、「(露が)消えない間に」、「後れてしまった露は」、「(露は)何に寄りかかったらいいのか」という意である。ここからは中の君が「露」により関心を向けているということが理解できよう。中の君は、朝顔よりもはかないはずの「露」が消え残っている現実——意外性に共感しているのである。<sup>14)</sup>

本来寄りかかるべき「花」が枯れ、「露」だけが残っているという現実、自らを「はかばかしくもあらぬ身」〔総角二四五頁〕と位置づける中の君の生にそのまま重なるものであり、中の君のこうした“存在の不安”は、物語の始発から繰り返し詠歌中に見られるものであった。

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守になるべかりける

〔橋姫一一三頁〕

絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

〔総角一八四頁〕

来し方を思ひいづるもはかなきを行く末かけてなにしたのむらん

〔総角三三七頁〕

「泣く泣くも…」は、八の宮家が宇治に隠棲する前の、父・姉との唱和である。既にこの時点で中の君は自分が他者に縋って生きる他ない存在であることを認識している。橋姫巻で、母親に「ただ、この君をば形見に見たまひて、あはれと思せ」〔橋姫一一九頁〕と遺言された父八の宮は「この君をいとしもかなしうしたてまつりたまふ」〔橋姫一一九頁〕と中の君を愛育した。そして姉大君もまた、死

の間際「このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、…こののみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる」〔総角三二七頁〕と薫に託し、今は薫の後見と匂宮の庇護を受けてある身である。多くの愛情を受け、大切に養育されたという点で、中の君は確かに正編のヒロインの系譜に位置づけることができよう。<sup>(16)</sup>しかし生かされている自分を自覚し、生き抜いていく術を模索し続けるところに、中の君の生に対する姿勢、即ち中の君の独自性が見い出せるのではないか。

中の君は今回の夫の結婚に関して「何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ」〔宿木三八四〜三八五頁〕と、その不安感を匂宮にさえ見せようとはしていない。それは、匂宮との関係の持続を願う行為であると同時に、<sup>(17)</sup>中の君の宮家の姫君としての誇り高さを表れであるとも言えるだろう。<sup>(18)</sup>しかしそんな中の君が、我が身の愁いを繰り返し歌に詠み込んでいる点、また「何にかかれる」という吐きを他ならぬ薫に向けている点、これらを統合させた時、世の無常を憂うる詠歌という体裁の向こう側には、庇護者たる薫への媚態が透き見えてくるのである。

#### 四 花の喩

激しい恋情を訴える薫、そんな薫に自分は「朝顔」ではないと拒みつつも、媚態を見せる中の君——二人の間に交わされた朝顔の贈

答は、その後の両者の接近、添い臥し事件を必然化するものとしてここに存在する。しかしこの歌は、ただそれだけの理由でここに据えられているのだろうか。

宿木巻に見える花の喩は、実は朝顔だけではない。

〔A〕(帝)「まづ、今日は、この花一枝ゆるす」とのたまはすれば、(薫ハ)御答へ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世のつねの垣根にはほふ花ならば心のままに折りて見ましを  
と奏したまへる、用意あさからず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな  
とのたまはず。〔宿木三七八〜三七九頁〕

〔B〕(落葉の宮ハ)「さかしらはかたはらいたさに、(返歌ヲ)そのかしはべれど、(ハの君ハ)いとなやましげにてなむ。

女郎花をれぞまさる朝露のいかにおきけるなこりなるらん  
あてやかにをかくし書きたまへり。〔宿木四一〇〜四一一頁〕

Aは、宿木巻冒頭、薫が今上帝から女二の宮との縁談を持ちかけられた場面、Bは、匂宮と六の君の結婚一日目の後朝の文の返歌(繼母落葉の宮の代筆)である。帝は女二の宮を「菊」に、落葉の宮は六の君を「女郎花」にそれぞれ喩えている。薫と中の君の「朝顔」の贈答歌は、ちょうどその間に位置する。

宮中の「菊」、三条宮の「朝顔」、そして六条院の「女郎花」——これらに共通して言えるのは、それぞれ喩えた者が権力と大きく結

びつき、その権力を行使しようとしている（あるいは、そうした欲望をうちに秘めている）存在であるという点である。男たちの野望と欲望が交錯する中で、女たちは何ら言葉を発することなく「道具」として花の喩に絡め取られている。しかもその花々は、かつて夕霧が紫の上を「春の曙の霞の間より、おもしろき権杖の咲き乱れたる」〔野分二六五頁〕、また玉鬘を「八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映え」〔野分二八〇頁〕と喩えたような華やぎを持たない。このことは、物語がそうした美しい花々の競演を切り捨てていくとしていくことの表れなのではないだろうか。女たちは、男達の権力闘争の中で辛うじて「のこり」、しかし「しをれ」「枯れ」てゆく存在である。

宿木巻が語ろうとするもの、それは花（女の象徴とも言えるかもしれない）の喩であることの拒否——女性性に絡め取られていくという生のあり方そのものの否定——に発するものではなかったかとも思われる。物語は、中の君の、花（大君）は「枯れた」として自らの生のあり方を模索していく姿を丹念に描いていくこうとしている。そしてそれは、浮舟へと継承されていく問題でもあるのである。

## 注

(1) 池田和臣「浮舟登場の方法をめぐって—源氏物語による源氏物語取—」

『源氏物語』宿木巻における朝顔の贈答歌（磯部一美）

(2) 『國語と國文學』昭和五十一—東京大学国語国文学会』など。

(2) 中の君が「物語」の中心にあって活躍するのは、総角巻末の大君の死以降である。しかし、次巻の早蕨巻での上京、続く宿木巻での結婚生活、苦惱、男子出産の後には早くも浮舟が登場している。中の君の人物像が最も深められているのが宿木巻であるといえよう。

(3) 「宇治十帖」の中でも、とりわけ目立たない存在である中の君が目ざれるようになったのは、昭和四十年代に入ってからのことである。その先駆ともいえる藤村潔氏は、その論の中で「中の君の結婚生活は、大君の世界のだめ押しとして描かれたのである」（『源氏物語の構造』昭和四十一—桜楓社）と述べる。こうした消極的評価は他に、千原美沙子氏（昭和四十六）、中野幸一氏（昭和四十六）、重松信弘氏（昭和五十七）、倉又幸良氏（昭和六十）、木村正中氏（昭和六十二）、武谷恵美子氏（平成元）の論などに見える。勿論これに反発するものや構造論の立場から中の君を積極的に評価しようとする論も少なくないが、近年はどちらかという個としてよりも「宇治十帖」という大きな物語の流れの中で、人物を相対的に捉えようとする動きが主流であるといえよう。

(4) 『源氏物語』の引用本文はすべて、新編日本古典文学全集本（阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳 小学館）に拠る。また、私に適宜傍線を付し、下には巻名・頁数を記した。

(5) 総角三九四頁。この他、例えば玉上琢弥氏の『源氏物語評釈』には「それにつけても薫は、まず姫宮のことが思い出されて悲しいのである」とあり、一方原岡文字氏は「歌語と心象風景—「朝顔」の花をめぐって—」（『國文學』第三十七卷四号 平成四 學燈社）において「大君ゆかりの女君として、今はその人への募る思いを抱えながら、同時に姉大君その人を共に追慕し得る人として、薫は誰よりも中の君を選ばずにはいられない。……こうした大君追懐の場面の「朝顔」の取り込みは、もとよりな

まめかしい魅力に溢れる「女郎花をば見過ぎて」立ち去る、道心の人薫の、無常の花への思い入れを語るものに他ならない」と述べている。

- (6) 勿論、新編全集頭注や玉上評釈、原岡論文が薫の中の君への恋情をまったく読み取っていないと言っているわけではない。むしろ本稿は「朝顔」を積極的に恋の手段として薫が利用しようとしている点を重視したいのである。この点については既に、小町谷照彦氏「薫は中君に対する執着をますます強め、そこに何らかの変貌が窺われるように思われる。中君の訪問に先立って独詠「けさのまの」を朝顔の露によせてもらしているが、それは人生を無常と認めてなおかつ刹那的な情念に身をゆだねて行こうとする現実把握である。そして、中君へのかなり大胆な愛情の告白の贈答「よそへてぞ」「消えぬまに」にとつながっている」(『源氏物語の和歌—物語の方法としての役割—』(『国文学解釈と鑑賞—特集古典文学の分析批評—』昭和四十二—至文堂)、越野優子氏「大君への思いに中の君への思いを重ねたこの歌の「朝顔」には、単なる無常だけではない異性即ち中の君を求める好色な思いが託されている」(「喩としての朝顔—源氏物語の朝顔の姫君を中心に」中古文学 第五十九号 平成九)等に指摘がある。本稿は、これをさらに具体的に、本文との絡みの中で実証していかうとするものである。

- (7) 卷第十 秋相聞 二二七四、二二七五 本文は新編全集本『万葉集3』に拠る。
- (8) 前掲原岡論文を参照。
- (9) 『和歌植物表現辞典』(平田喜信・身崎壽 平成六 東京堂出版) 『王朝語辞典』(秋山虔編 平成十一 東京大学出版会)、『歌ことば歌枕大辞典』(久保田淳・馬場あき子編 平成十一 角川書店) など。
- (10) 例えば、上京を直前に控えた中の君に「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる」[早蕨三五七頁]と、後悔を滲ませた歌

を贈っている。

- (11) 甲斐陸朗「源氏物語の人物把握の一方法—匂宮の人間像を中心に」(中古文学 昭和四十六)、榎本正純「総角巻 匂宮と中の君」(『講座源氏物語の世界』第八集 昭和五十八 有斐閣)、伊井春樹「匂宮の変貌—「幸人」中君との関連を中心に—」(『源氏物語作中人物論集』森一郎編 平成五 勉誠社) など。榎本氏はさらに「…もはや物語の世界を開示してゆくかつての源氏のような人物は見出し得ない。あるのは、「花心」と「聖心」を相互に批判し邪推しあったり、あるいは「世評」という窓を通しての偏った解釈を提示する人物たちである。いうまでもなく作中世界の「諸事実」はある角度—例えば作中人物や語り手を通して提示される。したがって、同一対象に対しても異なった解釈がなされたり、その人物のくだす解釈が妥当でないことも起こり得る(宇治十帖では、人物の偏った主観的解釈を作者は意図的に活用する)」と述べている。
- (12) 実はこの直前に、様々の物思いに眠れぬ夜を明かした薫が、弱々しく這いまつわる朝顔の花に目を留め、独り「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る はかな」(宿木三九一頁)と詠じる場面があるのだが、この独詠歌は中の君の世の無常を嘆いた答歌と呼応している。このことは、薫がもともと二条院を訪れた目的——「朝顔」に象徴される「世のはかなさ」を中の君と共有したいという思い——を、中の君を前にして恋情に変容させてしまったこと—薫の贈歌の異常性(恋情の愁訴)を暴き立てるものとなっているのではないだろうか。松井健児氏は、その論「薫独詠歌の詠出背景」(『源氏物語の生活世界』平成十二 翰林書房)の中で、薫の心情が歌という形式を取ると、恋愛譚の形式に取り込まれてしまうという興味深い見解を示している。
- (13) 新編全集頭注一四「三九五頁」、今井上氏「源氏物語『宿木論』論」(國語と國文學 平成十三) など。



- (14) 朝顔と露は、そのはかなさを競いあうものとして多くの歌が存在する。従って、どちらがよりはかないかという議論は、ここでは的を射ていないように思う。ただ、中の君の歌の意「朝顔に置く苦の露の方が残ってしまった」からすると、朝顔の方がよりはかないと捉えていると考えるべきであろう。
- (15) 大君の薫への恨み言は、薫に中の君の後見人としての自覚を植えつけるものでもあった。
- (16) 藤本勝義氏「宇治中君造型―古代文学に於けるヒロインの系譜―」（國語と國文學 昭和五十五）
- (17) 新編全集頭注一四「宿木三五八頁」
- (18) 少なくとも上京後の中の君は、例えば朝顔を手に訪れた薫に「いとめやすし」（宿木三九二頁）と言わせる程に女房をよくしつけている。